



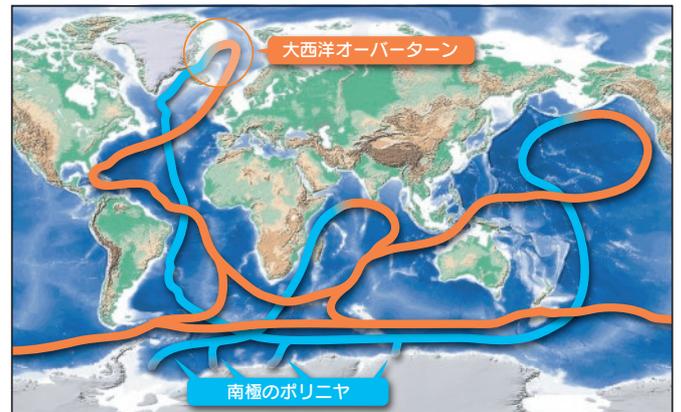
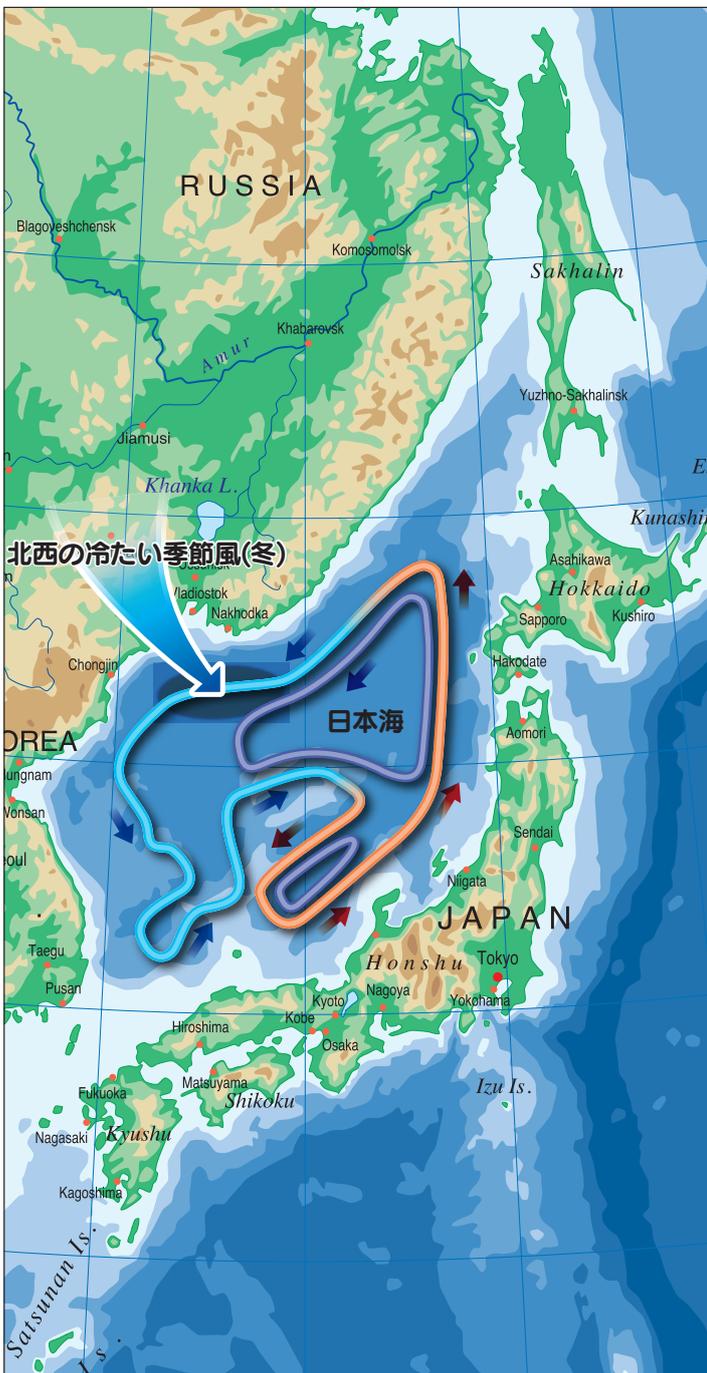
「ハイブリッド・エコ・ハートQ住宅の科学」④ エネルギー自活住宅の考え方

33・34pの紹介

九州住環境研究会では、左写真の「ハイブリッド・エコ・ハートQ」④エネルギー自活住宅の考え方の他、住宅に関連する環境について、4分冊の小冊子を発刊しております。住宅建築は、単に住宅を建てればよいというわけではなく、断熱性能などさまざまな数値によって性能管理が行われています。住宅の性能には、明確な基準があり、素材の採用や施工方法にも明確な根拠があります。それを項目毎にまとめたのが上記の小冊子です。これから順次、抜粋してご紹介致しますが、本冊子に興味のある方は、電話・インターネット等でお申し込み頂ければ差し上げます。

日本海から始まる地球温暖化の明らかな影響！

■日本海のコンベヤーベルト(200年周期)



●ブロッカーのコンベヤーベルト(2000年周期)

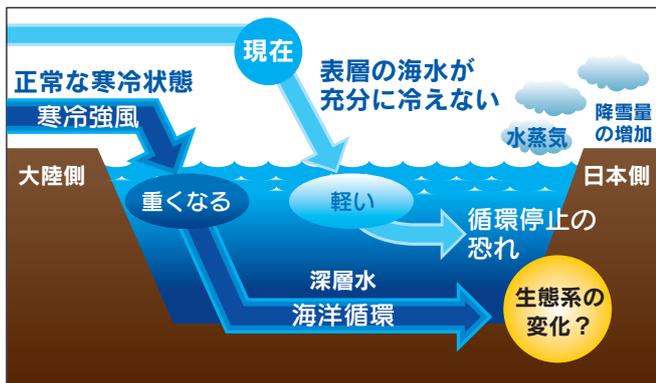
日本海は国際気候変動に関する政府間パネル(IPCC)で「ミニ大洋」に位置づけられ、地球温暖化の影響調査の最重要地点と指摘されています。(上図)の「ブロッカーのコンベヤーベルト」は、深層水の海洋大循環として2000年の周期で地球を回っています。深さが約2000mの日本海もまた、海洋大循環と同じような構造で、海洋大循環のひな形のような形で、約200年周期で循環していることが分かって来ました。温暖化により海洋大循環が停止した場合、どのような影響が起こるのか、大循環の10倍以上の早さで進行する温暖化の影響は、既に、初冬の豪雪やイカ漁の不良に表れています。日本海で起こっているこのような現象は、気象変動を考えると、いち早く異変が察知できる場所として、世界の研究者に注目されています。「日本海は世界の海で起こりうる変化をDVDの早回しで見ている様なもの」(環境研・荒巻主任研究員)。言い換えるならば、日本海は最も早く、温暖化の影響を受ける地点だと言うことになります。

冬の寒さと豪雪、夏の猛暑が常態化します！

北極海と日本海の温暖化が及ぼす影響？

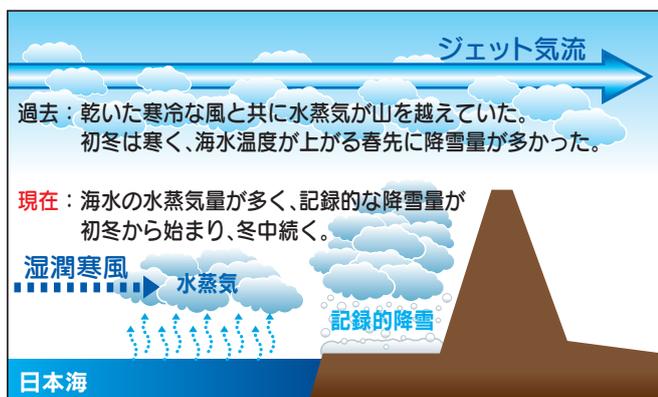
夏の猛暑、冬の寒波と豪雪、日本海と太平洋の影響を受ける気象のメカニズム！

■ 深層海流の流れが止まる危機



日本海の深層水は、ロシア極東部の北西の季節風がウラジオストック付近の海水を冷して、大循環のポリニヤ（海水冷却で深海に沈み込む地点）の役割をします。暖かい冬が増えて、海水を凍らせるほどの寒波が少なくなり、海水の沈み込みが少なく、深層水の流速を妨げています。海水の沈み込みは、日本海の深層に酸素を供給する役割があり、それがストップするとプランクトンの発生が少なくなり、日本海特有の深海に生息する蟹などの甲殻類の他、イカやブリ・マグロなどの回遊魚も餌不足で、絶滅の危機に直面してしまいます。

■ 日本海側の豪雪の原因



冬の日本海側は、大陸からの寒風で冷たい強風が吹き積雪量は、少ないのが特徴でしたが、温暖化が進行し

ている近年では、初冬から積雪量が多くなり、今まで経験した事がない豪雪で、流通網が度々ストップするのが常態になりつつあります。これは温暖化による大陸の季節風の弱体化と対馬海流（暖流）の温度上昇によるもので、通常は冬の終わりに積雪量が多くなる現象が初冬から始まり、秋田や山形・新潟等の山間部の豪雪地帯と同じ湿った空気が流れ込むからで、これが常態化すると予測されています。

■ 北極海の温暖化で連続低気圧が発生



温暖化で北極海の氷が溶けると、海水温は0℃程度なのに対し、シベリア大陸の気温が-50℃の場合、温度差は50℃です。海上には夏の積乱雲と同じような発達した低気圧が生まれ、地球の自転で反時計回りに、次々に北半球を巡ります。温暖化の進行速度が速まり、低気圧が次々に九州から北に北上するように表れるようになったのは、この様な影響からで、この低気圧は九州や本州南部に多量の降雪をもたらすと共に、以前の北風が変わり、南風の厳しい寒さをもたらします。これも地球温暖化の影響で、これからの九州は、益々暑くなる酷暑と共に、冬の厳しい寒さも意識して暮らす必要が有ります。